2007年度（第９回）学生懸賞論文「女性学インスティチュート賞」

総　評

金　田　知　子

今年度の「女性学インスティチュート賞」には、４点の応募がありました。残念ながら最優秀賞の該当作はありませんでしたが、１点に対して優秀賞が授与されました。以下に、選考委員会で出された意見をもとに、応募論文の内容と講評をまとめてみます。

今回、優秀賞を得たのは藤本梨沙さん（GE0601）の「ヴァージニア・ウルフに見る『両性具有』の精神」です。本論文は、ヴァージニア・ウルフの２作品（『自分だけの部屋』『オーランドー―伝記』）を通して、ウルフの「女性文学の継承」という視点から、ものを書く女性の問題点とウルフが理想とした「両性具有」の精神について論じた秀逸な作品です。最近の応募作品のなかでは、極めて文章表現力が高く、論旨も明快で、またジェンダーの視点が強く意識されていたことが選考委員会のなかでも高く評価されました。

しかしその一方、先行研究に対する検討が十分ではないとの指摘がありました。本来は、研究のオリジナリティを示すために、先行研究との対比において自分の研究にどのような特徴があるのかを提示されるべきなのですが、それが明示されていなかったということです。

また、本論文におけるフェミニズム批評が1970年代のものに限られているという点にも疑義を抱く意見がありました。筆者は、「両性具有の思想がフェミニズムという思想を超えた、調和のある、新しい人間のあり方を示すものである」と唱えつつも、1980年以降のフェミニズム思想には全く触れられていません。今後は、もう少し丁寧に研究レビューをされると、より充実した論が展開できると期待しています。

あと３点の応募作品について、選考委員会での意見を簡単に紹介しておきます。

「女子大学生の就職活動における母親の影響」（藤原久美子さん：H03705）は、興味深い研究テーマを取り上げ、その結果を丁寧に考察されていた点が評価されていました。得られた知見に関しても、女子学生対母親のみの関係に留まらず、父親の影響を含めた三者関係にまでその視点が向けられたことに、研究としてのオリジナリティが感じられます。その一方、調査票の選択肢の設定の仕方に不適切な点が見られるという指摘や、考察に物足りなさを感じるという意見もありました。

「Once Upon a Time: A Study of Struggling Women in Royal Fences」（戎郁枝さん：E03015）については、英語で論文を執筆しようとされた筆者の努力は評価されました。しかしながら、その内容が表層的であり、方法論的にも論文としての所作法がふまえられていませんでした。また参考・引用文献に関しても、所謂、学術論文ではなく、一般書、新聞記事、ネット記事に依拠されていた点も残念でした。

「恋愛映画の王道にみる普遍的な恋愛構造―『ティファニーで朝食を』と『プリティ・ウーマン』を読み解く」（島田絵梨さん：I04465）は、恋愛映画という日常的題材から女性が理想とする恋愛観を読み解こうとした作品です。全体を通して、興味深い内容となっていますが、考察対象となった２本の映画について、その選択の適切性が十分に説明されていないとの指摘がありました。また参考・引用文献が提示されておらず、分析の根拠が不明瞭でした。

以上、ややクリティカルな講評となりましたが、応募していただいた方々への激励の意味が込められているとご理解ください。

本年度の公募数は、昨年の10点に比べ、４点と非常に少なくなってしまいました。その理由は定かではありませんが、とにかく残念でなりません。来年度は、より多くの方のご応募を心待ちにしています。

（女性学インスティチュート　学生懸賞論文選考委員）